

今、日本で、世界で、起こっていること

東北福祉大学特任教授 有田 和正

●タイガーマスク運動？●

昨年暮れから全国各地の児童施設などの子どもたちに、ランドセルなどのプレゼントが届けられている。贈り主の多くが、漫画やアニメで知られる「タイガーマスク」の主人公「伊達直人」を名乗っている。地域も贈る方法もばらばらで、多くの善意の人がいるようである。

伊達直人は神出鬼没である。いつ、どこにあらわれるかわからない。贈り物は警察署の玄関先に置かれたり、養護施設に届けられたりする。

そもそもの発端は、昨年12月25日に群馬県中央児童相談所（前橋市）に届いた10個のランドセルである。「子供達の為に使って下さい」という伊達直人のメッセージがあったことが新聞・テレビで報道されたことから火がついた。

2011年2月現在、全国でさまざまな贈り物が確認されている。福岡市東区では、匿名男性が施設にランドセルを5個持参したという。ランドセルの価格は3万～5万円程度が主流という。

東京都内も、「伊達直人」と名乗る人から児童養護施設などへの贈り物が相次いでいる。「伊達直子」「伊達政宗」といった氏名を名乗る例もあったという。

内容も、ランドセルや文房具のほか、ベビーカー6台も宅配で届いた施設もあるという。現金（10万～2000円）が入ったケースもあった。小学生の伊達直人まで出現した。

全国各地の児童養護施設などに次々と匿名で届けられる贈り物に、子どもたちは「私たちのことを気にかけてくれている人がいる」と大喜びしているという。親と離れて暮らす子どもたちが、贈り物を受け取った

のは、人々の温かい人情である。結局、日本全国47都道府県で匿名の贈り物があった。これは日本的な善意であるという。匿名で、自分の営利行為とは無関係に支援を行う「粋」なあり方であるといわれる。助け合いの精神が不況のあおりで弱くなっていたのが、意外に日本社会に根強く残っていたことはうれしいことである。これが新しい公共といわれるものであろうか。



●大相撲本場所中止—八百長問題で●

日本の国技である大相撲は、1年間6回本場所が開かれる。1月東京、3月大阪、5月東京、7月名古屋、9月東京、11月福岡で開かれる。

ところが、この相撲に八百長があったことがはっきりした。八百長というのは、お金を払ってわざと負けてもらったり、勝ち負けの星の貸し借りをすることである。

ある力士は、「生活のために星を売った」と話している。力士としての地位を守ったり、金銭を得たりする目的で星を融通しあっていたらしいことがわかってきた。

十両になると、月給が100万円をこえる。そして「関取」といわれるようになる。このため、十両以上の地位になりたい。だから金を出しても白星を買いたくなるのであろう。八百長の仲介をする力士もいたという。

こういうことから、日本相撲協会では、2月6日の理事会で、八百長問題の全容が解明されるまで本場所を中止すると発表した。巡業も年内は中止することになった。「大相撲の歴史に大きな汚点」を残すことになった。

私たちの想像を超えるけいこをして、体と技術を磨き、ぶつけ合ってきた。この真剣勝負に、見る人の心を動かすドラマが生まれてきた。このため相撲ファンも多い。

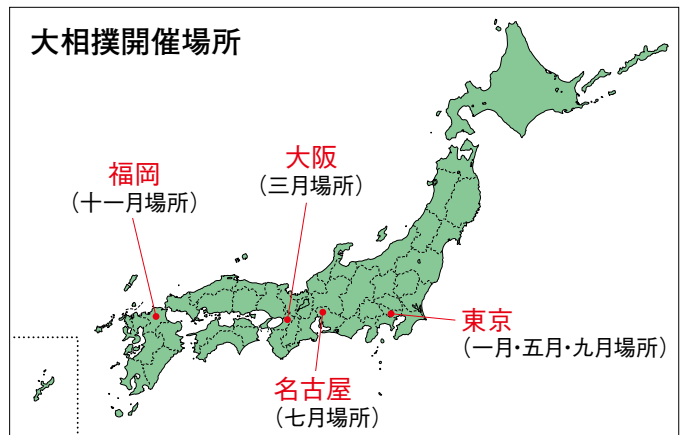
番付が一枚違うだけで圧倒的に待遇が異なる。昇進の悲喜劇への共感も、同じところに根ざしている。そこに金銭のやりとりまで絡んでいたとすれば、一喜一憂しながら見てきたファンのなんとむなしいことか。

これで「国技」としての存在意義も薄くなるだろう。放駒理事長は「断腸の思い。うみを出し切るまで土俵で相撲はお見せできない」と非常事態宣言をした。

春場所の大阪だけでなく、その後の中止にまで含みをもたせた言い方に危機感は伝わってきた。特別調査委員会（座長・伊藤滋早大特命教授）を協会が設置し、八百長の全容解明に力を入れているが、どこまで解明できるのか、いつまでかかるのかわからないという。また、大相撲の八百長問題で、日本相撲協会がめざしている「公益財団法人」化に暗雲が垂れこめている。認定されないと、税の優遇を受けられず、最悪の場合、国技館など協会財産の没収もあり得る。「国技」の行方はどうなるのか。

公益財団法人の最大の特徴は、税の優遇である。これまで本場所開催などの事業には、税率22%の法人税がかけられていた。しかし、公益財団法人により、本場所開催が「公益目的事業」と認められれば、原則非課税となる。

今のままでは、むずかしいのではないかと思われる。日本の「国技」の危機である。調査を見守りたい。



(2011年2月現在)